

氏名（本籍）	梅本 充子（大阪府）		
学位の種類	博士（社会福祉学）		
学位番号	乙第17号		
学位授与の日付	2017年3月18日		
学位授与の要件	学位規則第5条第2項の規定該当		
学位論文題目	地域在住高齢者を対象とした健康支援のための回想法に関する研究		
審査委員	主査	山崎 喜比古	日本福祉大学 特任教授
	副査	野村 豊子	日本福祉大学 特任教授
		〃 篠田 道子	日本福祉大学 教授
	学外審査委員	大西 丈二	名古屋大学 講師

論文内容の要旨

本論文は、序章と終章を含めた全9章で構成されている。本文:176頁。引用文献:章ごとに掲載されている引用文献数の合計は143点、うち英文文献数は60点。

序章 本研究の背景および目的と構成では、わが国の高齢化率が急速に進む中、近年、複合的な健康問題を抱える高齢者に対して、健康寿命の延長や広く健康一般と QOL の向上を目指す健康づくりがますます重要な課題となってきたと述べている。予防的・健康支援的アプローチの一つとして、回想法が注目されている。しかし、それまでの回想法研究は、認知症高齢者に焦点を当てたものが多く、地域在住高齢者への健康支援の観点からの研究はごく限られ、蓄積やエビデンスも乏しかった。そこで、本研究では、そうした新しい観点から地域在住高齢者を対象とする回想法の導入・普及を図り、また、そのためにも多様な回想法手法の構築を目指して、様々な回想法を試み、それらの効果を検証することを目的とした。

第1章 国内外の地域在住高齢者に対する回想法 (Reminiscence) 介入研究の展望では、欧米と日本の過去15年の介入研究の傾向を調べた結果を次のように指摘している。①研究対象者は、地域在住の認知症高齢者が最も多く（そこに一般高齢者が含まれることもある）、次いで、手術患者、ターミナル患者である。②研究場所は施設が多い。③効果指標として、抑うつが最も多く、他にはQOL、ウェルビーイング、自己に関することが取り上げられている。しかし、社会とのかかわりに関するものは、ほとんどみられない。④多様な手法としては、写真や懐かしい道具を使うことが多く、感覚刺激や芸術的（絵画や演劇など）の手法を使った研究は少ない。⑤回想法の効果については、参加者の一部にのみみられたとする報告や一致した結果が得られていないという報告がある。本研究は、①～⑤のそれぞれにおいて、これまで光が当てられてこなかった点に着目する実証科学的研究である。それは、地域在住の全高齢者を対象とした一次予防のポピュレーション・アプローチや、社会参加促進に向けたコミュニティ・アプローチを目指した点で新しく、且つ、社会福祉学や実践との接点の多々ある実証研究である。

第2章 日本で最初の回想法センターにおける地域在住高齢者を対象とした回想法導入と実証研究の成果では、2002(平成 14)年、日本で初めて地域に設立された回想法センターにおいて、梅本氏らが予防的視点と健康支援の観点から、健常高齢者と虚弱高齢者、軽度認知機能低下高齢者の3群に対する回想法の短期・長期効果の検証に日本で初めて取り組んだ研究について述べている。研究の結果は、回想法が、認知機能の改善や HR-QOL (以下 QOL と略す) の向上、回想法終了後における自主活動の継続、さらに医療費の削減などの点において、回想法の短期・長期に及ぶ有効性を示唆する結果であった。

第3章 日本で2つ目の回想法センターで行われた地域における回想法の効果では、日本で2つ目の回想法センターが設立され、梅本氏は、そこでも健常高齢者の健康保持と自己実現、社会参加と QOL 向上の観点から回想法の有効性に関する研究結果を述べている。介入群は非介入群に比べて、QOL の「心の健康」や「全体的健康感」で有意な改善が認められ、認知機能は、統計学的に有意ではないが、第2章の結果と同様の傾向がみられた。さらに、同地域でボランティア活動を行う高齢女性グループに8回の回想法を実施した結果では、認知機能では注意力に、QOL では「こころの健康」「全体的健康感」「活力」に改善傾向がみられた。また、女性ならではの懐かしい料理の実践を含めた回想法の終了後、自主活動へと発展したことが報告されている。

第4章 音の感覚刺激を用いた回想法の効果検証では、音を用いた回想法の単一介入グループの前後比較研究において、認知機能には傾向レベルで、QOL 「全体的健康感」には有意な改善が認められたと報告している。また、セッション評価において感情・意欲の効果が確認された。もう一つ、音を用いた回想法と従来の回想法との2群間比較の結果は、音を用いた回想法においては、従来の回想法と比べて、音に特有の効果は得られなかったものの、従来の回想法と同様、認知機能や QOL に介入効果が示された。音を用いた回想法も高齢者の個別性に合わせた回想法手法の一つとして採用できることが示唆されたとしている。

第5章 匂いの感覚刺激を用いた回想法の効果検証では、匂いを用いた回想法の単一介入グループの前後比較研究結果は、認知機能に有意な改善が認められ、QOL 「心の健康」に改善傾向がみられ、セッション評価における「回想、発言内容の質」の効果が確認されたとしている。もう一つの、匂いを用いた回想法と用いない回想法の群間比較の結果では、匂い使用群で非使用群に比べて、介入前の認知機能が低かったために改善効果が大きく出るという交互作用効果のみが有意に認められた。匂いを用いた回想法にも改善効果や天井効果がみられ、高齢者の個別性に合わせた回想法の手法の一つとして採用できるとしている。

第6章 アクティビティとしての演劇を用いた回想法の効果検証では、新たに演劇を加えた回想法の効果検証を取り上げている。検証の結果、認知機能の記憶力と QOL の「活力」について有意な改善が認められた。演劇活動は、共同作業を通してグループの仲間意識と絆を生み、自主活動につながったと考えられたことから、「プロダクティブ・エイジング」に向けて、より積極的創造的な活動につながっていく可能性が示唆されたとしている。

第7章 地域在住高齢者の家族のための認知症の早期発見用尺度 NOSGER の有用性では、この尺度が、世界の主要言語に翻訳され、信頼性も確認された汎用性の高い国際尺度であり、家族や身近な人でも測定可能な包括的尺度であると説明している。しかし、これまでわが国では、ほとんど活用されてこなかった。そのため、梅本氏らが集めた調査データを用いてこの尺度の信頼性と妥当性、そして有用性の検討・吟味を行なった。その結果、高い信頼性と妥当性が得られ、また家族による早期発見のための有用性が示され、査読付き学会誌にも2篇に分けて掲載された。本章はそれら2篇を結合し

ている。

終章 総括では、まず「第1節 本研究のまとめ」として、序章に始まり、第1章から第7章までの各研究結果を要約している。「第2節 本研究の意義」では、「地域在住高齢者に対する予防的介入と健康支援のための回想法の効果を実証研究から明らかにした」としている。さらに、11件の実証研究を4種類に分けて、それぞれの実証研究の意義・新規性を述べている。最後「第3節 今後の課題と展望」では、一貫した回想法の効果や研究デザインによるグループの等価の確保、長期的効果研究の必要性などが課題として残ったとし、今後、科学的根拠に基づく結果を得るためにメタアナリシスや混合研究法 (mixed method) などによる介入研究が必要であるとしている。

論文審査結果の要旨

1. 審査経過

2017年11月14日の2016年度第7回福祉社会開発研究科社会福祉学専攻会議において、梅本充子氏の博士学位審査請求論文が受理された。学内審査委員3名(山崎喜比古、野村豊子、篠田道子)は、それぞれに提出論文を査読したうえ、1月27日の18時より審査委員会を開催して、本論文の概括的評価と論点について意見交換を行なった。引き続き、梅本氏への最終試験(口頭試問および学力の確認)を実施した。その終了後に行なった審査委員会で、最終試験の結果ならびに外部審査委員の大西丈二氏(名古屋大学医学部附属病院・講師)の「審査報告書」の内容と結論も踏まえて、本論文が博士学位(社会福祉学)を受けるにふさわしいと判断し、合格との結論に至った。

2. 論文の評価

梅本氏は、2002年より今日まで10数年間に亘り、地域在住高齢者を対象とした健康支援のための回想法に関する実践と研究にかかわり、その研究は、査読付き雑誌に筆頭著者論文としてここ10年以内に掲載された分だけでも5篇ある。梅本氏の論文は、先の5篇を含む筆頭著者論文を基にした6章分と、ここ1年ほどの間に行なった文献研究の結果1章分を相互調整・統合し、序章と終章で挟んだものである。

梅本氏の研究と論文で評価されるべき点は、高齢者の保健医療福祉分野において、健康支援の見地から、対象者の個別性に見合った、積極性と活動性向上につながる様々な回想法を用意し、その効果に関する実証研究と知見を粘り強く積み重ねてきた点にある。外部審査委員の大西丈二氏によれば、本研究は、回想法に関する先駆的で極めて有用な成果であり、後続の研究にも有益な一定の発展性を示していると高く評価している。

他方、本論文にはいくつかの弱点と課題も見出される。

その一つは、先行研究の知見の整理の仕方に関してである。本論文の第1章において先行研究の知見に関して充実した記載が見られ、氏の回想法についての深い理解や海外の研究動向へのかなりの目配りがうかがわれるものの、整理方法にはもう一段の工夫が望まれる。本研究で用いられている回想法の位置づけがより明確化される整理法が必要である。

また一つは、研究デザインと研究方法に関することである。研究デザインは、本研究では単一介入の前後比較試験、非無作為化比較試験等が用いられており、現段階においては妥当ではあるが、今後の研究展開としては無作為化試験が望まれることは忘れられてはならない。また、健康支援のための回想法の効果指標の適切性や十分性もさらなる検討が望まれる。介入効果を効果指標の変化の有無

とその程度だけではなく、例えば QOL の向上に至るまでの媒介変数を用いたメカニズムの解明をめざしたり、量的分析と質的分析の両方を用いたりすることなども望まれる。

最後にもう 1 点、結果の考察・本研究の総括に関して、外部審査委員からの貴重なコメントをもとに指摘しておきたい。本論文では、梅本氏が多数実施してきた実証研究の結果を理論化しようという試みが弱い点である。そこから新たな仮説と介入の理論モデルとが構築されるならば、後続の研究への方向性が示され、また、本論文がより体系的な一つの研究成果として組み立てられる可能性も拓けるからである。

以上のような課題が残されているものの、本論文は全体として、本学の社会福祉学領域の博士論文に求められる水準を十分に満たしていると考えられる。

3. 最終試験（学力の確認）の結果

2017 年 1 月 27 日、梅本氏への最終試験（口頭試問）を実施した。はじめに、梅本氏から、氏が今回の学位申請論文を提出する以前に副査 1 の審査委員から受けた指摘・指導箇所をどのように加筆修正したのかを中心に、説明がなされた。続く口頭試問では、外部審査委員からの審査報告書にある指摘点も概略紹介した上で、主に副査の審査委員が本論文の問題点や疑問点について質問した。氏は、誤字脱字や不適切な用語・表現、文または文節の脱落が散見されることに対して、誠実に対応することを約束した。また、今後の研究の方向性や進め方にかかわる指摘とコメントに対しては、真摯に前向きに受け止めていた。今後とも、これまで 10 数年間一筋にやってきた、地域在住高齢者を対象にした、予防的視点と健康支援の観点からの回想法に関する実践と研究、特に一段と高いレベルでの実証研究の展開と、若い世代の育成に努めてほしいという願いを込めて、審査委員の意見は基本的に一致した。

最後に英語力の審査については、梅本氏の申請論文は、引用文献 143 点中 60 点が英文論文であること、また、審査に当たりすでに提出されている学会誌掲載済みの 5 篇の筆頭著者論文では英文抄録作りも経験していることに鑑み、英語力は十分であると判断した。

4. 結論

本審査委員会は、学位申請者の梅本充子氏は、日本福祉大学学位規則第 12 条により博士学位（社会福祉学）を受けるにふさわしいものと判断し、合格と判定する。

以上